

## 富山平野周辺の風宮の分布とその要因

田 上 善 夫

### Distribution of "Kazenomiya" around Toyama Plain and its related Factors

Yoshio TAGAMI

e-mail: tagami@edu.toyama-u.ac.jp

#### Abstract

Distribution of Kazenomiya, shrine of wind god, and its related factors are treated in this study. People pray at Kazenomiya for a good harvest, but many other reasons affect to its distribution. Some results of this study are as follows. 1) There are usually shrine of water god near the shrine of wind god. But both gods are distinguished from each other by their characters. 2) The character of wind god may be similar to god of mountain. Wind god is hidden behind the mountain god at typical area where the mountain god is enshrined. 3) Kazenomiya has kept its classic style. Stone, special sand or giant tree are considered as the symbol of god. 4) Kazenomiya, like many other shrines, is affected from the arrangement of shrine at modern times. God of wind is changed to the god of grains. 5) Kazenomiya has been affected by the spread of famous shrines. It is clear especially at the border area of feudal clan.

キーワード: 富山, 日本, 風宮, 風, 祭, 神社

Key words: Toyama, Japan, Kazenomiya, Wind, Festival, Shrine

#### I はじめに

富山県の井波風や岡山県の広戸風、愛媛県のかまじ風など局地的強風の吹走する地域をはじめとして、風神を祀る社祠が全国各地にみられる(田上善夫, 2000a)。また、風鎮を祈願する祭りも全国各地で行われており、地域により風祭、風鎮祭、風止などさまざまな名で呼ばれている(田上善夫, 2000b)。風祭には各家や部落で行われるものから、広域から多数の人々が集まるものまであり、中には北陸にもみられるように、奉納行事が芸能として発展している場合などもある(田上善夫, 2001)。こうしたさまざまな風宮および風祭の伝統は、生産の中心である稲作に対して強風が収穫を損なう脅威であるため、鎮風祈願が広く行われたことを示している。

富山県でもとくに富山平野南部の婦負郡・上新川郡では、風神を祀る社祠は風宮あるいは不吹堂といわれている。大正年間には、この地域の卯花村掛畑、黒瀬谷村下伏領、船峯村直坂、福澤村下双嶺の4ヶ所の不吹堂が紹介されている(田口克敏, 1917)。またこの地域では風祭は風神祭といわれるほか、風の盆ともいわれる。八尾町では幕末以来二百十日に盆を行ってきたが、大正のなかばから周辺の農村で行われている風の盆を取り入れるとともに、町特有のおわら唄におわら踊りを組み込み、おわら祭りを行った(卯花村史編集委員

会, 1951)。

ただし災害をもたらす強風にも台風やフェーンなど異なる総観気候学的な条件のもとで発生するものがあり、その影響は地域の地形の違いなどにより異なるが、風神は風の最も強いところに祀られるわけではない。また風祭とよばれるものも、風を鎮め五穀豊穡を祈願するのみならず、天と地の神を祀り、国造りや開拓のようを再現し、悪霊を払うなど風災のほかにもさまざまな内容を含んでいる。そのため風宮および風祭は鎮風祈願にまつわるものであっても、その周辺地域において風災は必ずしも明瞭に認知されるものではないことがある。

局地内においてもまた広域においても、さまざまな風宮および風祭がみられることは、それぞれの土地ごとに風災の出現また対応に差異があり、さらに他の地域とのかかわりの中で変遷したことを示している。そのため本論ではこうした風の祭祀について、それぞれの地域における土地の自然的基盤とのかかわりや周辺地域からの影響また交渉などの諸要因について、検討することを目的とする。その端緒として風宮が多数分布している富山平野南部山麓地域を例にし、風宮のおかれた地点周辺の地形を中心に風などのかかわりから調査する。また富山平野を例として、風宮のおかれた地域と周辺における社祠のかかわりについて検討する。さらに広域における風宮と、他地域から勧請されその後名称を変えるなど古

くから変遷してきた神社とのかかわりについて、明らかにすることを試みる。

## Ⅱ 八尾山地東部の地形と風宮

### 1. 八尾町久婦須谷周辺の不吹堂

富山平野南部の山麓一帯は、砺波平野南部と同様に強い南風の吹走する地域である。この黒瀬谷の小長谷には、風吹の地名もある。前述のように婦負郡・上新川郡には、古くから不吹堂の分布が知られている。

その中の掛畑は、八尾町を北流する久婦須川によって形成された河岸段丘上にある(図1)。久婦須川左岸の掛畑をはじめ右岸の宮腰、またその西隣の笹原谷は、かつて卯花村に属した。掛畑では300余年前に上流の小原村の下に堰を設けて用水が引かれ、宮腰では天保年間に用水が開鑿された(成瀬昌司, 1967a)。

一方下伏は、室牧川と神通川にはさまれた小起伏の八尾山地の最東部にある(図1)。卯花村の下流側および東側山地の北谷は、かつて黒瀬谷村に属した。北谷には下伏のほか、土根上、北谷の部落がある。昭和28年の町村合併後に黒瀬谷村は婦負郡八尾町となるが、下伏など山地内の一部は上新川郡大沢野町に属した。

### 2. 掛畑の不吹堂と八幡宮

大正のはじめに掛畑の不吹堂と記されたものは、現在は跡が残るのみである。この掛畑付近は神通川沿岸の大沢野面に相当する中位段丘上にある(深井三郎, 1979)。上黒瀬の八幡宮の下流側から、西の小起伏山地に解析された小谷への道を10mほど入り、その右側の山道を登ると用水に出る。10mほど進むと用水を渡る橋があり、渡って斜面をさらに30mほど登ると、標高190m付近の平坦な地に不吹堂の跡がある(図2)。

かつては、ここで祭りが行われたという。後述の上黒瀬と異なり、氏子だけが集まった。堂の前に莫座を敷いて座り、神主が風神の祝詞をあげた。その後お神酒と重箱に詰めてきた油揚げや蒲鉾などで直会をした。全部で2時間くらいであった。また明治の頃には、60kgの俵を持ち上げて2秒静止する力くらべがあった。さらに7斗の重さの石もあった。うどんの食べくらべなどもされたという。

この不吹堂は、現在は掛畑八幡社に合祀されている。同社は諏訪の上にあり、<sup>ほんだわけのみこと</sup>菅田別命を祀る。一時釈迦堂ともいわれた。八幡社は合祀される以前から不吹堂と関係があったが、不吹堂とは呼ばずに、掛畑頓後の地に風の宮があり風水害の守護神とともに龍田比古と龍田比咩を祀ることが記されている(卯花村史編纂委員会, 1951)。現在では八幡社の祭りは3月1日、4月6日、8月21日である。不吹堂があった当時

の神主に後継者がいないことから、杉原神社宮司を迎えて行われている。

### 3. 上黒瀬大岩の風堂と八幡宮

掛畑の南隣の上黒瀬集落にも、風堂と呼ばれる風宮があった。風堂の呼称は、この付近以外の地域にはないものである。久婦須川左岸の中位段丘上にある上黒瀬の集落の上流側から斜面を登ると、北流する用水に出る。用水に沿って200mほど上流側に進み、そこから右に登ると上方に畑が広がる。その最上部の標高220m付近に、立石が祀られている(図3)。そのさらに200mほど奥を滝谷といい、奥寺があったという。

この風堂は現在では上黒瀬八幡宮に移り、同宮には菅田別尊とともに、龍田比古神・龍田比売神が祀られている。同宮はもともと村人が産土神として奉斎してきたもので、

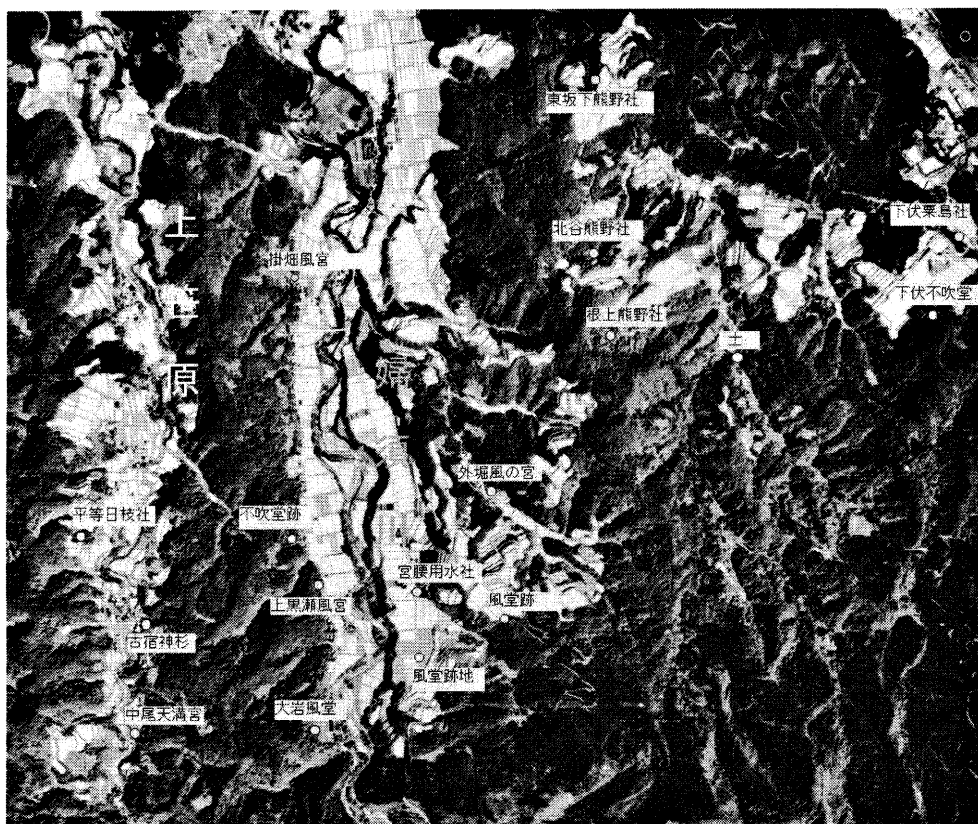


図1 八尾町東部の地形と風宮の分布

小起伏の八尾山地を別荘川や久婦須川が北流する。久婦須川の左岸に中位段丘、右岸に低位段丘が続き、その間は谷底平野となっている。八尾山地最東部には山頂・山腹緩斜面が点在し、水田が棚状に開かれている。国土地理院(平成4年)富山地区空中写真より作成。



図2 八尾町掛畑の不吹堂の跡

五輪塔の上部と基部が残る。この不吹堂は、10年ほど前に掛畑の八幡宮に合祀された。宮ごと合祀する際、着色された木製の神像を人々が頒けあった。神像は仏さんともいわれたという。



図3 八尾町上黒瀬大岩<sup>かぜんどう</sup>の風堂

手前側の斜面は耕作地で宮田という。立石の表面には何も書かれていない。祭りのときには、石を持ち上げて力比べをした。

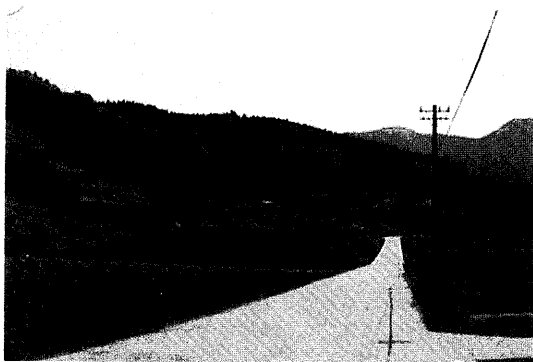


図4 八尾町宮腰<sup>かぜんどう</sup>の風堂の跡地

圃場整備で、現在は水田になっている。この風堂は、100mほど下手の宮腰の八幡宮に、大正の初め頃に合祀された。



図5 八尾町外堀の風堂の跡

丘陵上の最上部を宮腰用水が流れ、平坦面に水田が開かれている。風堂の位置は宮腰用水を分水して落下させるところにあたる。



図6 八尾町外堀の風の宮

八幡宮の境内社になっている。かつて山の上にあった風堂を、ここに降ろした。砺波から移した砂を、ご神体としている。



図7 八尾町上笹原の神實の杉

天明年間(1781～1788)に稲荷用水を引いた古宿の長兵衛が、祀っていたといわれる。日枝社の祭りのときには、神官が同社よりこの杉の方向を向いて遥拝する。

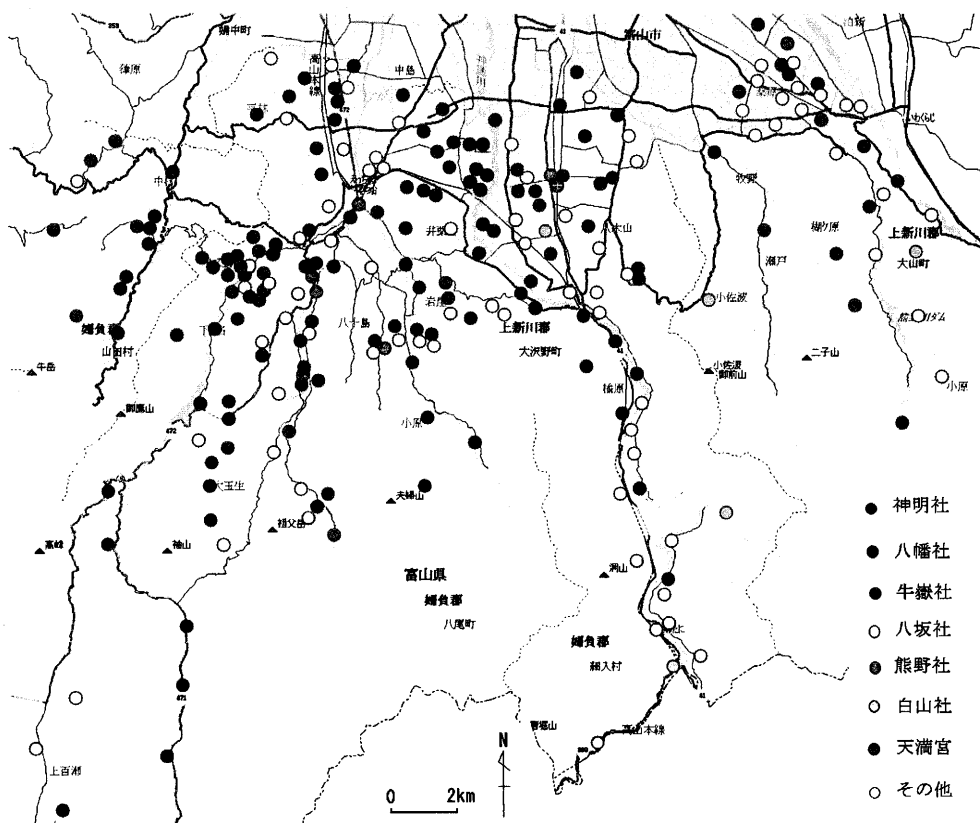


図8 神通川流域山麓部での神社分布 (大山町・大沢野町・細入村・八尾町・山田村)

神明社が広域に展開するが、神通川の左岸側では八幡社が多数みられる。山間部でも八幡社の分布が卓越する。水色の部分は常願寺川や神通川の開口部から下流にひろがる現在の扇状地である。段丘化した地域とも異なり、神明社・八幡社の割合が高い。

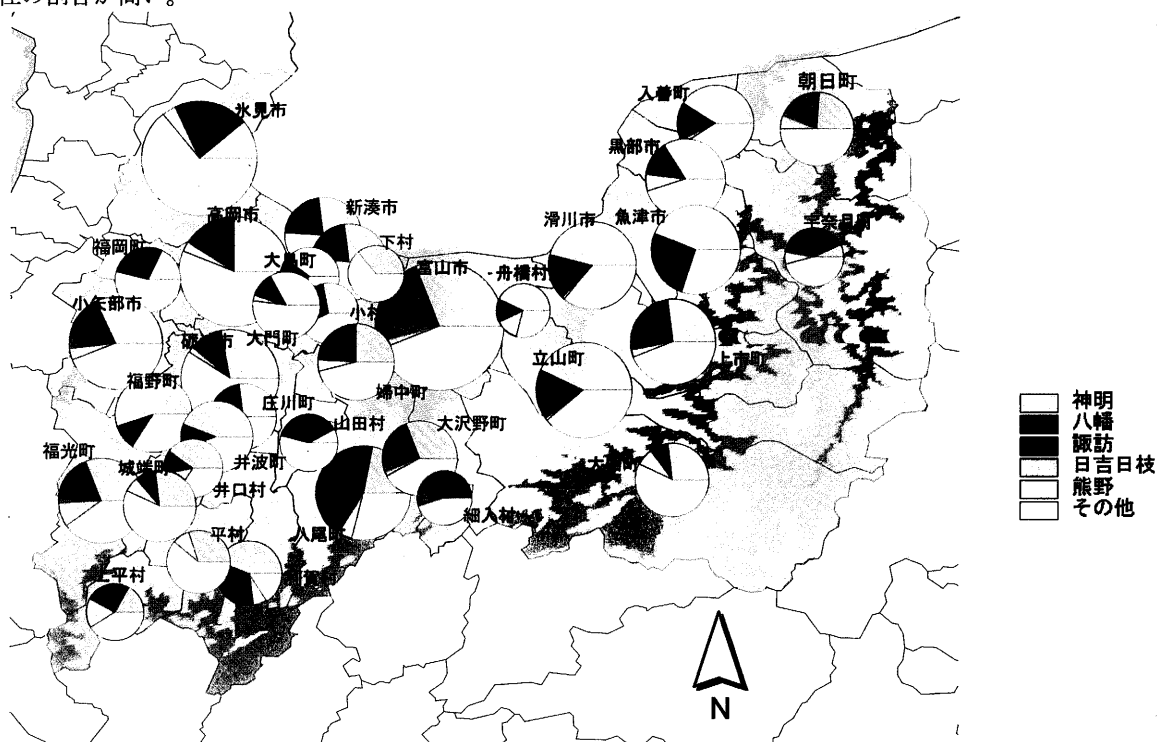


図9 富山平野周辺での市町村別主要神社の構成割合

円の大きさは神社総数を表し、最多は富山市の 308 社、最少は舟橋村の 7 社である。神社の構成割合は、全県的に神明社が圧倒的に多く、八幡社がそれに次ぎ、両社で過半数を占める。ただし、宇奈月町、八尾町、山田村、細入村、上平村、福岡町では神明社は最多ではなく、氷見市でも八幡社と同程度である。

八幡宮と奉称されるようになったのは、元禄年間(1688～1703)といわれる。今も境内に残る大櫓が神実とされてきたが、明治42年に社殿が造営された。風宮、龍田風社もまた同年に合祀されたものである(卯花村史編纂委員会, 1951: 富山県神社庁, 1983)。掛畑の場合と同様に、風宮は後の呼称ではないかと思われる。

同八幡宮では、3月1日が火祭り、4月6日が春祭り、8月21日が秋祭りである。祭りでは八尾町黒田にある杉原神社の宮司を迎えて、風神の祝詞を含めて2つの祝詞があげられるという。かつて22ヶ村の人々が集まった頃には、対岸の宮腰からも人々が来たという。

ここで前節の掛畑の不吹堂と大岩の風堂は、隣接した集落の風宮であるにもかかわらず、以下の点で大きく異なっている。すなわち、1) 呼称が一方は不吹堂、他方は風堂である、2) 祀り方がお堂と神像に対し、立石である、3) 祭り参加者は村人だけに対し、22ヶ村の人々が集まる、4) 合祀された年は最近に対し、明治末とずれる。また、不吹堂は上黒瀬八幡宮に近接するのに、遠い掛畑八幡宮に合祀された。これらのことから、両社を同列に扱えない可能性もある。

#### 4. 宮腰の風堂跡と八幡宮

久婦須川をはさんで上黒瀬の対岸に宮腰集落がある。宮腰は、神通川沿岸の春日面に相当する低位段丘上にあり(深井三郎, 1979)、左岸側より新しい面であるが、高度差はほとんどない。この宮腰集落より上流側の標高190m付近のところに、かつて風堂が祀られていた(図4)。合祀先の宮腰の八幡宮は、慶安二(1649)年の勧請と伝わり、菅田別尊を祀る。文久元(1861)年に村の産土神となる。現在では宮腰の氏神、上谷の氏神と風の神を合祀している。4月6日、9月6日が祭りで、杉原神社宮司を迎えて風神の祝詞があげられる。

この付近では春先や秋に風が強く、稲の穂だけ残して吹き飛ばされ建物にも被害が出るという。また、ここより川上の桐谷ではより強いという。

また宮腰の八幡宮境内には、水の神も祀られている。宮腰用水は、安政元(1854)年三月に、桐谷字川尻より宮腰のやや下流側にある本法寺まで通水し、そのときに用水神が祀られた。宮腰用水は文久二(1862)年に井栗谷まで延長され、明治41(1908)年7月に用水守護神が根ノ上丸地山に祀られたが、この社もその後宮腰用水神社として合祀されている。

#### 5. 外堀の風の宮と八幡宮

宮腰集落背後の小起伏山地には、上部まで棚田が続く。宮腰の段丘面とは違い山腹緩斜面で、斜面上方に集落はない。その標高250m付近にも、宮腰とは別の風堂が祀られていた(図5)。付近の外面谷(「そで」と呼ばれる)・上谷・堀田の部落が合併して、現在は外堀とよばれる。以前は風堂の前で1月1日に祭りをし、雪のときには上がっていくのが大変だったという。

外面谷の谷の奥は小さな盆地状となり、その最奥部に外堀

の八幡社がある。その境内には風宮が祀られている。上述の山の上にあった風堂を移したものである(図6)。4月4日と6月15日が祭りで、杉原神社宮司を迎えて風神の祝詞があげられる。ただし宮腰と異なり、水神は祀られていない。久婦須川右岸のこの地域一帯では、水神を宮腰で祀る一方で、風神は外堀で祀るようにしたという。

この風宮の御神体は砂といわれるが、同様の御神体は他にもみられる。二百十日前後の風がとくに強い上新川郡大山町の小坂や花崎でも風神が祀られており、小坂の御神体は、一升枧に砂を入れたものという(大山町史編纂委員会, 1964)。

#### 6. 下伏の不吹堂

八尾山地東端の大沢野町下伏でも、山腹緩斜面の上部まで水田が続いている。10年くらい前に基盤整備があり、田一枚あたりは広いが、転作されているところも目立つ。下伏は宮腰用水の通る主稜線部から東に遠く離れており、大正9年になってトンネル数個を通して用水が引かれた。用水の神は下伏には祀られておらず、宮腰の祭りにはここからも総代が行く。

丘陵上のひとときわ小高い山の上、標高260m付近に、不吹堂がある。不吹堂では風の祭りが6月15日に行われる。下伏の集落から1軒あたり1人、男の人だけが参加し、女の人や若い者また子供も出ない。祭りには大沢野町塩の多久比礼志神社、八尾町黒田の杉原神社双方の宮司が来る。昔は笹餅を作ったという。

不吹堂の下方には下伏と田池の集落があり、それぞれに粟島社がある。どちらの粟島社も4月11日が祭りである。下伏585の粟島社は、元和二(1616)年より、齒の神、大己貴神、少彦名神を祀り、杉原神社宮司が祭りをする。下伏827の粟嶋社は、やや新しく文化年中(1804～1818)より少彦名神、大己貴神を祀り、多久比礼志神社宮司が祭りをする。

不吹堂は小祠であるが、双方の神社より神主が集うため、産土神とは異なる扱いがされているようである。

#### 7. 北谷の神社

下伏の北では、八尾山地東面の谷の中を中心に水田が続いており、それぞれの谷ごとに集落がある。下伏に隣接した土部落には神社はなく、さらに北の根上に熊野社があり、伊弉冉命が祀られている。承応三(1654)年の創建といわれるが、かつては伊須留岐彦社であり、明治10年頃に改称したものである。4月12日と11月8日が祭りで、杉原神社宮司がくる。境内には新しい狛犬が奉納されている。今では根上集落には地元の人達はいなくなり、営農の人達が入っているという。

その北の八尾町北谷には風宮等はないが、不吹堂が大沢野の下伏にあり、また宮腰の不吹堂が用水脇に20年くらい前まであったことが、部落の人に知られている。北谷には熊野社があり、伊弉冉尊を祀る。天文十八(1549)年の勧請と伝わるが、根上と同様にかつては伊須留岐比古社であり、明治4年頃の書上げの際に誤って熊野神社とされたという。祭り

は4月12日で、杉原神社宮司がくる。熊野社には立石が二重にあり、また境内には桂化木で作られたものもある。

さらに北の八尾町東坂下では、不吹堂等は知られていないようであった。東坂下の熊野神社は、天正三(1575)年の創立と伝わり、伊弉冉尊を祀る。ここでも明治16年頃に、伊須留岐比古社を熊野神社と改称した。祭りは4月12日で、太鼓を叩いたりするが、獅子などはなく、また女の人は供物をして御詣りするが、祭りには参加しないという。

これらの部落は下伏とは異なり、いずれも伊須留岐比古社を祀っていた。熊野社と改称されているが、いずれにせよ山岳信仰の要素がみられる。このように風宮あるいは不吹堂がない一方で、この地域には山岳信仰の神社をもつことに特色がある。

### Ⅲ 風宮と富山平野周辺の神社

#### 1. 神通川流域の神社分布

前述の八尾山地の北では、飛越峠を北流してきた神通川と立山から西流してきた常願寺川が扇状地を形成している。神通川には西から井田川、東から熊野川が合流する。井田川は上流では山田川、室牧川、野積川、久婦須川に分かれる。川沿いに河岸段丘が発達し、井田川左岸は高位段丘の上野台地、井田川と神通川間は中位段丘の大杉台地、神通川右岸に中位段丘の大沢野台地と高位段丘の船倉台地がある(深井三郎, 1979)。常願寺川の左岸は高位段丘の上野・大川寺台地、和田平・文殊寺台地、黒牧台地が続いている(深井三郎, 1980)。

山田川上流の百瀬川上流域を除けばおよそ旧富山藩領で、現在は婦負郡山田村、八尾町、細入村、上新川郡大沢野町、大山町である。このうち神通川沿いの大沢野や細入をはじめ、八尾も樺峠を介して飛騨との交流が深い。越中からはのぼり塩や飛騨ブリ等々、飛騨からはこうぞ等の物資が行き来した。一方、八尾の大長谷から折折峠を越えて金沢に至ることはなかった(成瀬昌司, 1967b)。そのため加賀藩との結びつきの強い富山の中で、飛騨あるいは内陸山地の影響を帯びる地域である。

この地域では久婦須谷のみならず、風の盆の行事が伝統的に行われてきた。また扇状地上や谷筋に沿って多くの神社が分布しており、とくに八尾山地西部の室牧川に沿う宮ヶ島や上野付近では、多くの神社がみられる。八尾山地東部では、小さな風宮や不吹堂はとくに八幡社に合祀されていたが、その周辺を含めても、八幡社は多数分布している。とくに神通川の西側である山田村、八尾町、細入村では、顕著に八幡社が多い。次いで多いのは神明社である。なお奉称されるとき、八幡は「八幡宮」が「八幡社」を上回るが、神明は「神明社」が「神明宮」を上回る(図8)。

#### 2. 特定社への集中について

この地域に八幡社が多い理由は明らかではないが、中世には開かれていたことを示している(杉原節雄, 1967)。八幡社の祭神である菅原別命は武神・軍神であるとともに、平和

の神・農耕の神であり(卯花村史編纂委員会, 1951)、こうした面もこの農村地域に受容された一因と考えられる。

八幡社に次いで神明社が多い。八尾町の北に隣接する婦中町では、神明社は新たに開かれた村々に祀られ、大体江戸時代の創建とみられている(長島勝正, 1968)。とくに山田川より西の山側で少なく、井田川より東の神通川沿岸では最も多い(米原 寛, 1996)。神通川の東の大沢野町また大山町でも、同様に扇状地上に神明社が多くみられる。古い村で八幡社が多く新しい村で神明社が多いという傾向は、ここでも同様である。

熊野社も、熊野川の名にも示されるように、この付近での熊野信仰の盛行を示すとみられている(重杉俊雄, 1958)。また神明社も後に伊勢講を作る中で勧請されたものである。お伊勢参りや熊野詣での道筋は明らかではないが、それらの神社が多いことはこの地域が交通の要路にあることに結びつくと考えられる。

また、山田村とその周辺には多くの牛嶽社がみられる。富山平野と砺波平野の間にそびえる牛嶽は、金剛堂山や薬師岳、さらに県東部の立山や僧ヶ岳、県西部の白山や医王山また石動山と同様に山岳信仰の対象であった(久保尚文, 1978d)。また熊野社も山の神や木の神にまつわり、開拓と同時に農業の祖神となった(重杉俊雄, 1958)ので、山岳信仰の流れをくむと考えられる。また立山の地主神といわれる刀尾社を含めて、こうした山岳信仰の社が多くみられる。ただしこれらの社と風宮とは、隣接することはないようである。

#### 3. 富山平野周辺の地形と神社

風鎮祈願行事は富山平野南部だけでなく、砺波平野南部や口能登地域でも行われる。ただしそれらの地域に分布する神社は現在では富山平野南部とは大きく異なっている。古く大和政権の拡大にともない、大和政権およびその協力部族にもとづいて神社が編成替えされた。また神をもたらしした氏族が定住化すると、祖先神も地縁神化して祭神の解釈も変わっていくという(久保尚文, 1978b)。風土記にも神社は社号のみしか記されず祭神の知られぬものもあったが、本居宣長(1729~1790)が指摘するように、後に記紀などより似通った神名をその神社の神と定めた類も多いという。さらに富山における神社の史料は、すべて江戸~明治期のものである(久保尚文, 1978a)。延長五(927)年の延喜式から知られるのは越中は33社のみであり、風の神が祀られるにせよ現在の神社や祭神は往昔の姿とは大きく異なることを前提に考えなければならない。

平成8年の資料にもとづくと、富山県内には合計2,400余の神社がある。県内のすべての神社名について、市町村別にその数を集計する。ここでは複合名の神社や境内社も対象に含んでいる。神社は富山県全体では、神明、八幡、諏訪、熊野、白山、天満、稲荷、日枝、日吉、住吉、春日、金刀比羅、牛嶽、八坂、愛宕、火宮の順に多い(表2参照)。これらは牛嶽を除くと、全国でみられる神社名であり、勧請されて広まった神社が多いことを示している。

富山県内の35市町村別にみても、神明社の構成割合は全県にわたり多い(図9)。ただし氷見市および内陸の町村の中には、八幡社が最も多い地域がある。また諏訪社は、呉東と氷見方面に多く、砺波平野にはほとんどみられない。

#### 4. 特定社への集中の経緯

富山県では、名社中でも神明社が著しく多く、江戸時代でも同様である(田上善夫, 2000a)。近年でも、大正13年に2960の神社がある中、天照大神を祀るのは1212社あり、昭和57/58年には宗教法人の神社は2277社、神明社が717社であった(小倉 学, 1984)。

この最多の神明社に関して、富山県内には弘田御厨や鶴坂御厨があった。室町時代には伊勢朝熊御師・道者の活動にともない、いたるところに神明社が勧請された(久保尚文, 1978d)。江戸時代にも、新田開発、用水掘削に関して祀られた(久保尚文, 1978e)。同様に熊野社も、立山<sup>とつみ</sup>外宮が新熊野社領に加えられて御師の活動が盛んになり、中世の田畑開拓の神として勧請された(久保尚文, 1978d)。

神明社に次いで多い八幡社は、古くから貴族や寺社の荘園に勧請されたようである。たとえば放生津の守護所や、高瀬庄地頭方の東大寺八幡宮、福光の宇佐八幡宮などがある(久保尚文, 1978d)。他にも賀茂神社は倉垣荘、新保御厨、寒江荘、春日神社は藤原氏の氷見<sup>あの</sup>阿努荘中村など、祇園八坂神社も滑川一帯の堀江荘を領した(久保尚文, 1978d)。ただし八幡社にとくに集中がみられ、さらに荘園のない山間部にも広まっている。

延喜式以降の資料を欠くため、上述の変遷の詳細は明らかではない。ただし近世には大きく変化した。前田利長は慶長十五(1610)年に、高岡城内に稲荷大明神を勧請し、寛永十三(1636)年には、高岡神明、八幡、熊野、稲荷、大木神社に敷地・作田を寄進した。富山藩でも前田氏の祖の菅原道真にちなみ天神信仰が普及した。日枝山王社も前田氏の尊崇を受け、伊勢御師にも氷見小境の地を安堵した(久保尚文, 1978e)。これらの神社の多くは、現在富山県内で多数を占めている。また、延宝二(1674)年には、越中では神明社と八幡社がほぼ拮抗していたが、天保六(1835)年には、神明社の割合が急増したのに対して、八幡宮は急減した(田上善夫, 2000b)。神明社の割合は天保の頃には現在とほぼ同様であり、集中には前田氏の政策が反映しているように考えられる。

また富山にも<sup>まれびと</sup>客人信仰として素盞鳴命、大国主命ら出雲系の神々を祭神とする神社も多いといわれる。もともと能・越両国を通じて能登羽咋の気多大社は最有力の神社であり、富山にも伏木に気多神社がある(久保尚文, 1978c)。ただし前述のように古くは名神は少なく、新たな神名に付会して由緒が作られた可能性はある。北陸道から離れた能登では特徴的な神社分布があるが、氷見の神社の構成割合が特異であるのも、その影響を受けたと考えられる。また八尾も同様に、隣接する飛騨との交流の影響を受けたとみられる。

## IV 風宮と広域における神社の変容

### 1. 神社の名称の差異

全国的には風祭は内陸や沿岸地域など各地で行われており(田上, 2000b)、かつ八幡社や神明社のみに結びつくわけではない。風の祭祀は名神社の勧請以前から行われていたが、各地の神社の変遷は風宮を変容させたと考えられる。とくに現在の神社の構成は風宮にも影響している。

平成7年の全国神社祭祀祭礼総合調査(全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会, 1995)には、現在神社本庁で所管する神社を基本に、単立法人の神社が所載されている。これに基づいて熊野、諏訪、多賀の三社の県別数が集計された。熊野神社は全国的にみられるのに対して、諏訪神社は特定地域に集中する(神社本庁教学研究所, 1996)。

上記資料から、都道府県別また市町村別に神社数の集計を行う。神社の名称は後から字をあてたものが多く、同じ神社名でも漢字表記はさまざまである。そのためひらがな表記について集計する。ただし神社名は、〇〇神社のほか、社、神宮、宮などの奉称があるが、基幹の神社名について集計した。また、奉称の濁音や拗音でのひらがな表記の差異も同一のものとした。

このように都道府県別に神社名ごとにその数を集計すると、多数みられる神社は地域的に異なることがわかる。延喜式では、神社名は個々に異なり土地固有の名が多いが、現在ではむしろ広域にわたる神社が数多い。これらは後世に勧請されたものであり、こうした広域に神社が展開することにより、さまざまな影響がもたらされたと考えられる。

### 2. 本社と境内社

本社のみで都道府県別に5社以上みられるものを対象として、全国で度数を集計し、さらに境内社についても集計した。境内社はかつて別の地にあった神社が合祀されたりしたもので、本社と同様に地域に密接な関係をもつためである。集計の結果、全国にわたって多数みられる神社があり、その中で主要なものを示す(表1)。

表1 主要神社の本社および境内社の数

	本社 境内社			本社 境内社			本社 境内社		
あきば	324	1143	さん	2985	914	てんまん	2281	1102	
あたご	896	611	しらひげ	292	44	はくさん	1798	255	
いつくしま	576	474	しんめい	4067	721	はちまん	8723	1176	
いなり	3504	4655	じゅうに	653	51	ひえ	625	100	
おおとし	551	167	すかわら	692	364	ひかわ	270	19	
かしま	687	103	すさのお	259	93	ひよし	951	132	
かすが	1134	281	すみよし	616	248	ほしのみや	185	9	
かとり	477	27	すわ	2693	348	みしま	474	54	
きふね	429	146	せんげん	354	227	やさか	1274	1393	
くまの	2588	327	つしま	322	714	やま	3109	1713	
こうたい	335	140	てん	4034	2528	わかみや	913	660	
ことひら	595	979	てんじん	1277	799				



本社と境内社の割合は、神社により異なる。本社として祀られるより境内社として祀られることが多いのは、秋葉社、稲荷社、金刀比羅社、津島社、八坂社である。愛宕社、厳島社、菅原社、浅間社、天神社、山神社、若宮社も、境内社は本社の過半に達する。一方、香取社、白髭社、神明社、十二社、諏訪社、白山社、八幡社、日吉社、氷川社、星宮社、三島社は、境内社が少なく、本社に対して2割以下である。ただし本社として祀られるか、境内社として祀られるかは地域によっても異なる。

境内社が多いのは、秋葉社が火伏、稲荷社が豊穰・商売、金刀比羅社が航行安全、津島社・八坂社が疫病除のように、霊験あるいはご利益が明瞭であることが関係すると考えられる。

一方で境内社が少ないのは、特定の地方に分布が限られて、勧請されることが少なかったことなどが関係すると考えられる。たとえば氷川社は埼玉県大宮市にあり、素盞鳴尊、櫛名田姫命、大国主命を祀る。武蔵国一宮で、東は元荒川、西は川崎までに多い。しかし、古く杵築大社(出雲大社)を祀ったため、他では八坂社、天王社の名で祀ったと考えられている(川口謙二編著, 1999)。星宮社は栃木県に多く、磐裂神、根裂神が祀られる。高知県では星神社が多く、天御中主命などが祭られる。

### 3. 広域に分布する神社とその分類

前節の集計は、同一表記のものについてである。ただし表記にはさらに差異がある。すなわち、a)「づみ」、「ずみ」など旧仮名づかいや濁音、b)「いつくしま」、「むなかた」、「べんざいてん」などの異称、c)〇〇八幡、××八幡などの地名を冠した複合名、などである。

これらの差異は同一として扱い、さらに境内社を含めて、都道府県別に、名称ごとの数を再集計する。それには本社の名称が全国で100社以上みられるものを対象とし、結果として全国で500社以上集計されたものを示す(表2)。

これらの主要神社は都道府県別にみると、全国的な分布の傾向が異なることがわかる。これらに、多変量解析法を適用して分布の特色を抽出する。ただし因子分析や主成分分析を試みると、1) 全国、2) 東日本ー西日本、3) 太平洋側ー日本海側、4) 内陸ー沿岸、

のように全国を二分するような成分が導かれる。これらは神社分布の特色を必ずしも適切に表さないため、クラスター分析法を適用し、各神社の分布の特性を把握する。

クラスター分析の結果、大きく6つの型に分類される(図10)。すなわち、中部、全国、内陸、関東、中国、九州に分布の中心をもつ型があらわれる。その分類にしたがって、神社の都道府県別の数を示す(表2)。

### 4. 神社分布にみられるタイプ

**中部型：**とくに東海・北陸地方への集中が顕著なものである(図11上)。このように、東海・北陸に分布の中心があるのは、そこに本源をもつ神社である。秋葉社は静岡県西部の秋葉山に、津島社は愛知県津島市にある。秋葉山三尺坊大権現は火伏せの神として、素盞鳴尊、大穴牟遲命を祀る津島社は疫病除けの神として、その周辺地域および都市部に勧請されたとみられる。一方、白山社の本源は石川県鶴来町の白山比咩神社で、白山比咩神あるいは菊理媛神を祀る。白山修験として、地元に関係の深い浄土真宗や曹洞宗の布教とともに、勧請されていったとみられる。

ただし八幡社および神明社は、東海・北陸地方のほかにも、全国的に分布する。八幡社は青森、宮城、秋田の東北地方北部や岡山、広島、山口、徳島の瀬戸内地方でも構成割合が1割を超えている。宇佐八幡宮は応神天皇を祀り、国家鎮護の神として、東大寺をはじめ最も早くから仏教と習合・提携したため、寺院の鎮守として全国に勧請され、さらに源氏一族も氏神として崇めたため、御家人一統の武家の守護神として各地に勧請された(川口謙二編著, 1999)。藤原氏の氏神である鹿島・香取の神を祀る春日社も、その地方荘園などから展開したものとみられる。このように古くからの寺社や武士に結びつくものが多いが、とくに中部に分布が集中するのは、都や幕府など国の中心に近いことにかかわるように考えられる。

**全国型：**東北地方から九州地方にわたって分布する(図11下)。熊野三山は平安時代に仏教修行の道場となり、羽黒山伏と提携して東北一円に勢力を伸ばし、熊野比丘尼も熊野の本地を語って回った(川口謙二編著, 1999)。熊野詣では上皇から庶民に至るまで広まった。また海難除けや雨乞いなど水に纏わる琴平社も、伊勢とならんで誰もが一度は詣でるところであった。このように広範な庶民の崇敬の対象であったことが、全国的な展開の一因と考えられる。

山神社は福島などでは「やまじんじゃ」、長野では「やまのかみしゃ」、佐賀では「やまがみしゃ」、山梨や大分などでは「さんじんじゃ」とよび、大山祇命を祀る。山の民の間では獣や樹木を支配する山の神であり、農民の間では春から秋まで山を降りて田の神になる。また、愛宕社は、京都市右京区の愛宕山に祭られる防火の神である。稲荷社はむろん農業、商業の神である。このように、山で田で町で、普遍的な祈願の対象であることにより、全国的に祀られているものと考えられる。

なお皇大神社は山形に多く、天照大神を祀る。同様に天照

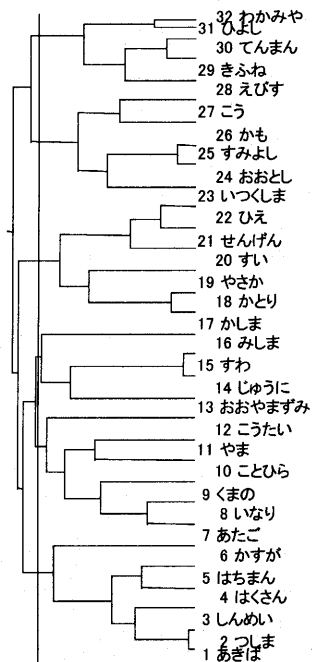


図10 神社分布型の樹形図

項目間の距離として、マハラノビスの汎距離を用いる。結合過程での距離の再定義には最長距離法を用いる。



表2 主要神社の分布型と都道府県別の数

都道府県	神社総数	中 部						全 国						内 陸						関 東						中 国					九 州				
		秋葉	津島	神明	白山	八幡	春日	愛宕	稲荷	熊野	琴平	山	皇太	大山祇	十二	諏訪	三島	鹿島	香取	八坂	水	浅間	日枝	厳島	大歳	住吉	賀茂	荒	姪子	貴船	天満	日吉	若宮		
北海道	1055	4	1	3	3	47	0	5	139	4	21	5	1	7	0	2	3	1	1	0	10	1	0	24	0	5	2	0	6	0	11	0	2		
青森	823	0	0	50	12	139	7	9	169	56	7	3	0	14	1	9	3	6	3	5	3	1	2	14	0	1	6	0	1	7	12	2	2		
岩手	1109	12	4	32	24	104	3	37	107	59	13	11	3	33	0	13	3	3	0	54	10	0	3	9	0	4	7	2	2	3	25	7	4		
宮城	1267	25	3	42	16	156	6	48	58	83	7	30	7	6	1	17	2	44	4	18	8	1	11	5	0	4	8	1	1	4	53	6	4		
秋田	1571	5	1	203	32	200	4	39	158	62	14	50	0	9	1	27	3	7	1	14	15	1	8	6	0	7	8	3	4	2	36	13	5		
山形	2204	19	5	39	61	196	13	35	277	131	29	145	231	6	3	56	9	11	0	37	15	2	37	29	0	14	6	1	2	7	43	3	6		
福島	3861	25	14	76	43	291	32	136	504	298	23	118	11	63	11	145	38	81	3	133	29	18	26	33	2	28	4	1	2	16	132	28	46		
茨城	3399	21	0	49	31	185	24	119	313	92	35	7	13	5	24	50	12	347	248	214	46	57	37	36	0	10	7	3	2	8	169	12	6		
栃木	2422	6	6	54	18	112	13	103	161	55	48	21	5	4	20	21	13	51	1	217	15	37	28	30	0	8	19	2	2	2	100	7	1		
群馬	1698	19	0	72	20	115	8	20	136	32	16	0	0	17	5	138	8	7	2	125	10	26	25	19	0	5	11	0	1	1	74	1	3		
埼玉	3327	20	7	101	32	205	19	68	422	49	25	9	5	8	8	112	11	8	125	348	20	98	41	25	0	12	1	5	4	2	177	6	7		
千葉	3831	9	1	136	42	321	62	39	249	246	43	43	16	18	18	98	19	23	77	191	97	104	100	73	0	12	16	4	4	14	174	14	17		
東京	2552	21	5	153	25	173	19	23	628	67	25	9	1	2	7	48	13	11	15	38	57	54	63	40	0	12	0	2	4	7	106	8	11		
神奈川	1815	15	5	135	25	144	11	5	207	60	32	19	9	1	7	60	23	10	1	58	21	29	59	35	0	13	3	1	3	3	67	6	12		
新潟	5321	28	5	769	197	398	25	13	285	151	57	61	8	51	404	959	17	13	2	23	32	9	55	20	0	34	8	6	4	8	125	54	57		
富山	2427	5	1	732	76	323	27	19	61	80	30	2	1	1	2	88	6	4	0	21	28	2	46	1	1	29	16	0	6	11	79	39	7		
石川	2389	16	3	75	276	415	44	22	80	25	46	2	0	2	0	46	0	7	0	17	12	3	12	7	0	43	11	0	24	12	86	95	23		
福井	2186	16	1	125	340	341	113	14	85	50	29	15	2	7	0	22	2	7	0	21	7	3	21	10	1	15	23	0	20	10	72	90	13		
山梨	1629	20	12	113	18	182	21	9	54	59	27	59	9	2	3	139	9	5	1	8	9	24	17	2	0	7	4	0	5	3	105	6	37		
長野	4187	162	71	238	59	211	22	15	147	64	90	113	45	30	28	409	14	25	2	38	58	24	13	21	1	12	14	18	12	5	169	13	29		
岐阜	5354	365	231	619	414	531	87	74	342	89	137	83	8	17	8	89	2	5	0	18	32	29	20	30	4	24	23	2	8	39	221	57	82		
静岡	4163	55	201	204	76	440	30	32	280	89	45	188	4	16	19	92	40	13	0	50	72	116	36	36	6	12	21	9	12	22	177	24	71		
愛知	6524	627	395	763	200	503	43	34	426	132	121	120	9	12	12	58	9	11	1	14	38	22	11	80	0	17	7	8	12	23	207	52	73		
三重	1438	13	6	79	8	66	25	12	110	5	11	35	2	4	0	7	1	2	0	4	12	8	2	8	0	6	6	2	11	0	29	0	11		
滋賀	2679	31	31	58	34	254	55	50	173	25	46	24	10	0	5	10	5	3	2	59	12	3	39	18	0	7	19	1	34	18	163	113	86		
京都	2713	36	0	29	18	190	66	91	274	50	37	33	11	8	5	10	2	4	1	31	16	3	11	39	4	22	20	3	41	15	135	34	44		
大阪	1484	2	2	24	5	69	43	9	226	7	28	1	21	0	2	5	3	2	0	28	9	0	5	18	5	37	5	1	65	3	85	5	16		
兵庫	5809	45	3	85	17	491	101	137	571	91	112	66	45	7	10	23	4	12	1	141	21	1	23	102	439	136	31	114	123	13	365	45	110		
奈良	2092	4	5	38	20	166	193	29	96	12	45	14	17	9	26	2	2	1	0	65	13	2	6	91	2	16	6	2	42	3	94	3	15		
和歌山	979	13	1	13	2	83	23	3	70	19	21	1	7	0	1	8	0	2	0	20	3	1	0	22	5	23	3	0	62	0	23	14	26		
鳥取	1066	9	1	4	2	19	2	2	35	10	5	2	0	1	1	9	2	5	0	1	2	0	4	6	1	3	19	33	5	4	21	4	0		
島根	3076	29	1	31	4	254	17	53	157	35	81	31	0	4	4	19	9	8	2	23	23	0	5	39	47	11	21	78	104	16	98	9	46		
岡山	2744	4	0	21	5	375	26	15	143	42	30	37	2	5	2	24	4	6	0	7	10	0	10	32	9	13	32	189	26	6	154	23	27		
広島	3193	18	1	115	2	402	16	21	141	29	44	32	2	16	5	16	3	2	2	18	15	1	10	94	105	28	16	193	105	17	143	12	24		
山口	1529	13	0	7	7	236	7	7	71	22	23	8	1	4	0	8	10	1	0	22	7	0	4	39	41	18	9	18	62	20	86	14	28		
徳島	2434	40	3	28	6	285	32	15	16	19	37	103	2	12	19	27	4	3	0	128	28	0	10	13	2	19	8	28	57	3	89	19	59		
香川	1630	3	1	18	4	114	23	2	36	21	60	39	1	4	2	7	5	2	0	32	14	0	14	16	1	14	12	35	19	4	101	3	21		
愛媛	2275	9	2	38	6	164	19	4	54	29	53	29	3	12	9	8	135	4	0	35	7	0	9	59	1	31	15	62	58	11	177	9	41		
高知	2843	26	0	69	8	155	24	26	26	53	81	22	11	96	21	8	23	2	2	95	12	0	0	46	0	28	14	8	46	10	204	44	47		
福岡	5457	49	1	30	35	362	35	33	216	109	62	51	6	73	5	29	25	5	1	26	86	2	20	75	12	27	20	11	174	228	952	109	127		
佐賀	1460	4	1	8	8	84	4	5	56	36	18	28	2	29	4	11	3	2	0	40	8	4	13	41	0	17	2	0	8	2	329	12	37		
長崎	1869	3	1	3	5	80	8	7	100	47	99	18	7	62	0	7	1	4	1	35	28	1	6	25	3	24	4	2	40	9	132	1	35		
熊本	3120	22	1	9	7	131	25	8	77	97	77	34	23	10	1	43	3	12	3	53	43	0	15	32	1	18	7	9	52	6	736	39	36		
大分	2928	31	3	69	9	183	23	29	132	67	93	160	9	20	0	12	18	6	2	92	15	0	8	32	17	21	7	4	43	117	497	24	32		
宮崎	892	2	0	3	0	20	5	14	49	22	6	7	0	3	0	11	4	1	0	24	21	0	3	6	6	7	2	1	14	0	54	2	10		
鹿児島	1330	1	0	30	8	43	10	17	42	35	4	14	1	31	0	39	3	1	0	25	13	0	33	9	2	9	2	0	16	3	64	1	39		
沖縄	18	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0																								

大神を祭るのは岩手の大神宮や長崎県の大神宮神社、熊本県の皇大神宮がある。これらの県では周辺にくらべて神明社が少ないので、神明社の別称に相当するのではないかと考えられる。

**内陸型：**この型には、大山祇、十二、諏訪、三島社が属する。狩猟、農耕、軍の神を祀る諏訪社は本源が諏訪市にあり、信越を中心に分布する（田上善夫，2000b）。諏訪社は九州南部にも多く、鹿児島県では南方神社でも建御名方神を祀る。

大山祇社の本源は愛媛県の大三島にあり、水軍を守護する海の神であるとともに、山の精霊を総支配する神でもある。鎮座地から三島大明神ともよばれるが、愛媛には三島社が多く、関東の守護といわれる静岡県の大嶋神社も大山祇神を祀

る（川口謙二編著，

このはなさくやひめのみこと  
の木花開耶媛命を祀る。室町時代末期から講による富士登拝が盛んになったが、富士山の見える範囲に多い。また日枝社の山王祭は江戸三大祭の一つである。幕府の庇護を受けたことが、関東に展開した一因と考えられる。

水神社は千葉などで「すいじんじゃ」とよばれるほか、山神水神社とよばれることもある。水天宮はもともと筑後川の水神であったが、壇ノ浦で滅んだ平家の御霊を祀るようになり、安産の神として知られる。このようにいくつかの要素が含まれるため、分布は関東のほか東海や九州にも多い。

**中国型：**厳島、大歳、住吉、賀茂、荒神社が属する。近畿から瀬戸内にかけて分布し、とくに兵庫と広島に中心をもつ。この地域に本源があるのは、厳島社と住吉社である。厳島社は広島県宮島に市杵島姫命を祀り、宗像神社も市杵島姫命などを祀る。河川に由来する航海安全の神である。住吉社はかつて住吉とよばれた大阪市住吉区にあり、墨江三神と神功皇后を祀り、遣唐使の海路守護が祈願された。ただし厳島社および住吉社は全国にも分布する。市杵島姫命は七福神中の富貴をもたらす弁財天と同一視され、神仏分離後に多くの弁財天が厳島神社に改名された(川口謙二編著, 1999)。また住吉社は和歌や農耕の神である。航海安全のみならず、農、商、文にわたる靈験により、各地に勧請されたと考えられる。

**大歳社や荒神社は、**兵庫、広島、岡山に集中する。大歳社の神は須佐之男神の御子神で、正月に来て家々に祀られる年神と同一神である。「とし」は穀物をあらわし、五穀豊穡が祈られる。荒神社の多くは素盞鳴尊を祀り、火迦具槌命を祀ることもある。荒ぶる神信仰が仏教に基づき創り上げられ、また竈神とも土地の神ともいわれる。この荒神信仰を山伏や日蓮行者が家々に持ち込んで普及させた(川口謙二編著, 1999)。賀茂社も同系列の神を祀るため、分布が似たことが考えられる。ただし賀茂社は東日本にもみられるが、京都の上賀茂神社、下鴨神社の荘園にまつわることが考えられる。

**九州型：**天満宮などで、とくに北九州に分布の中心がある(図12下)。本源は大宰府天満宮にある。ほかにも北野神社や菅原神社、また福岡県に多い老松神社でも、菅原道真を祀る。貴船社の場合、本源は京都市左京区にある。社殿はあるが貴船山全体がご神体で、貴船川の川上の神といわれて、祈雨と祈晴がされる。平安時代以降に民間でも信仰され、全国各地に勧請された(川口謙二編著, 1999)、北九州にとくに多いのは、旱魃・洪水害の多さと結びつくかもしれない。

蛭子社は、九州北部のほか、日本海側を含めて西日本に多数分布する。ひるこのみことあるいは漁労にまつわる事代主命を祀ることが一因と考えられる。大阪でも多いのは、七福神の一つとして市の神ともされたためのようである。

日吉社は日枝社と同一であるが、九州では「ひよし」と読むことが多いようである。本源は大津にある日吉大社である。ただし滋賀でも「ひよし」社が多い。

若宮社とは、親神に対する御子神の社の意である。八幡社と結びつきが深いといわれ、若宮社も九州北部をはじめ、全国に分布している。

## V 風宮の分布要因の検討

### 1. 風神と水神の祭祀の影響

八尾山地では、風宮は谷や緩斜面の耕地上端に多くみられた。こうした山間部では風宮が祀られる位置は、同時に用水の付近で、分水地点にあたるところも多い。稲作へは風害同様干害また水害は重大で、五穀成就には鎮風とともに鎮水の祈願が欠かせない。

この八尾町卯花地区は、すでに天正十一(1583)年の佐々与左衛門の知行目録に記され、また富山藩の貞享元(1684)年の石高書上帳には、下笹原、掛畑、宮腰、谷(外堀)、北谷、下伏、根上、土の名がみえ、さらに元禄十一(1698)年の古田、新田高村付帳には、上笹原、上黒瀬も記されており(重杉俊雄, 1967)、古くから稲作が行われていた。各集落は山間地の段丘や緩斜面にあるため、稲作に用水は欠かせない。

記録に残るものでは、久婦須谷では掛畑用水が明暦〜寛文(1655~1673)の頃に、また岩屋用水が元禄十六(1703)年に開鑿された。笹原谷では稲荷用水が天明年間(1781~1788)に、また平等用水がその20年ほど後に作られた。宮腰用水は古くからあったが、山間部の開鑿は困難なため比較的新しく、嘉永七(1854)年に宮腰まで、文久三(1863)年に外面谷の田形から北の堀田、北谷、東坂下などへ通じ、また慶応元(1865)年には東の土、下伏に通水した(重杉俊雄, 1967)。この宮腰用水は桐谷の標高260m付近で取水された後、宮腰では緩斜面上部245m付近、北谷では稜線の東側に抜け、下伏にも緩斜面最上部240m付近に引かれている。

宮腰では通水を期して用水の神が祀られた。また延伸の起点の田形と根上の竜ヶ峰には、大正14年に流水の分配を主宰する水分神が祀られた(重杉俊雄, 1967)。このように水神を祀る社の起源は明瞭である。また近隣の集落間でも、宮腰には用水の神、外堀には風宮というように分けられ、さらに下伏ではその不吹堂の祭りのほかに、宮腰の用水の神にも総代が詣るなど、風神と水神の区別も明瞭である。

ところで、久婦須谷は掛畑付近やさらに桐谷では著しく風が強いといわれる。実際に卯花村では多くの風害が記録されている(表3)。風災は18世紀末から19世紀初に多いが、いずれにせよこうした風害が度重なる中で、風神を祀り強風災害除の祈願が行われたものと考えられる。

表3 卯花村付近での風害

正徳四(1714)：	富山藩山方一帯で風害、稲作被害。
天文四(1739)：	八月六日。南風で小井波村の中稲に風害。
安永元(1772)：	晩稲が風害・水害。
天明四(1784)：	八月朔日、十七・八日に富山藩山方及び野積で風害。
寛政三(1791)：	八月六日に北の暴風雨、二十日に南の暴風。
享和二(1802)：	八月七日南の暴風。前日の六日が二百十日。
文化十一(1814)：	七月、南風で中稲・晩稲に被害。
文政六(1823)：	十月、風害。
文政八(1825)：	十月、北の大風。
天保七(1836)：	八月十三日昼頃、大暴風雨。作物が吹きちぎられる。
明治25(1892)：	4月1日。南の強風。
卯花村史編纂委員会(1951)より集成	

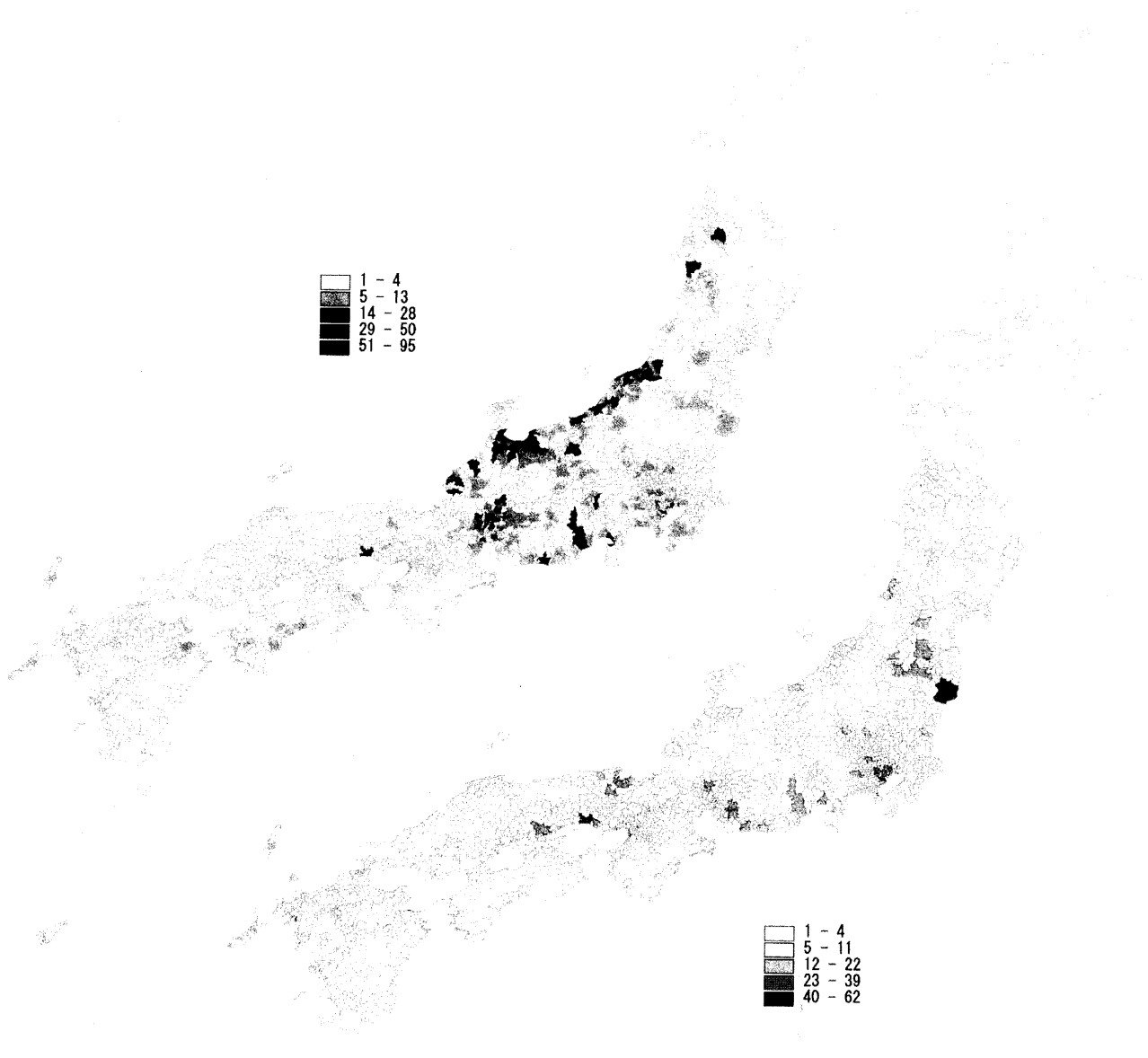


図 11-上 中部型 (神明社の分布)

秋葉・津島・神明と、白山・八幡、さらに春日の各社が含まれる。神明社の割合は、富山周辺で全国一高い。神明とは天照大神のことで、東京に多い天祖神社も天照皇大神を祀り、長野県では伊勢神社に天照皇大神を祀る。戦国時代末期から飛神明の勧請が一時期流行し、広域に展開した。

図 11-下 全国型 (稲荷社の分布)

愛宕、稲荷、熊野、琴平、山、皇太の各社が含まれる。東京や大阪の周辺では、その割合が著しく高い。伏見稲荷神社をはじめ稲荷社では、五穀を司る倉稲魂神<sup>うかのみたまのかみ</sup>などが祀られ、稲霊信仰に結びつく。多くは無格社や屋敷神であった。中世以降には殖産・商業の神ともされた。

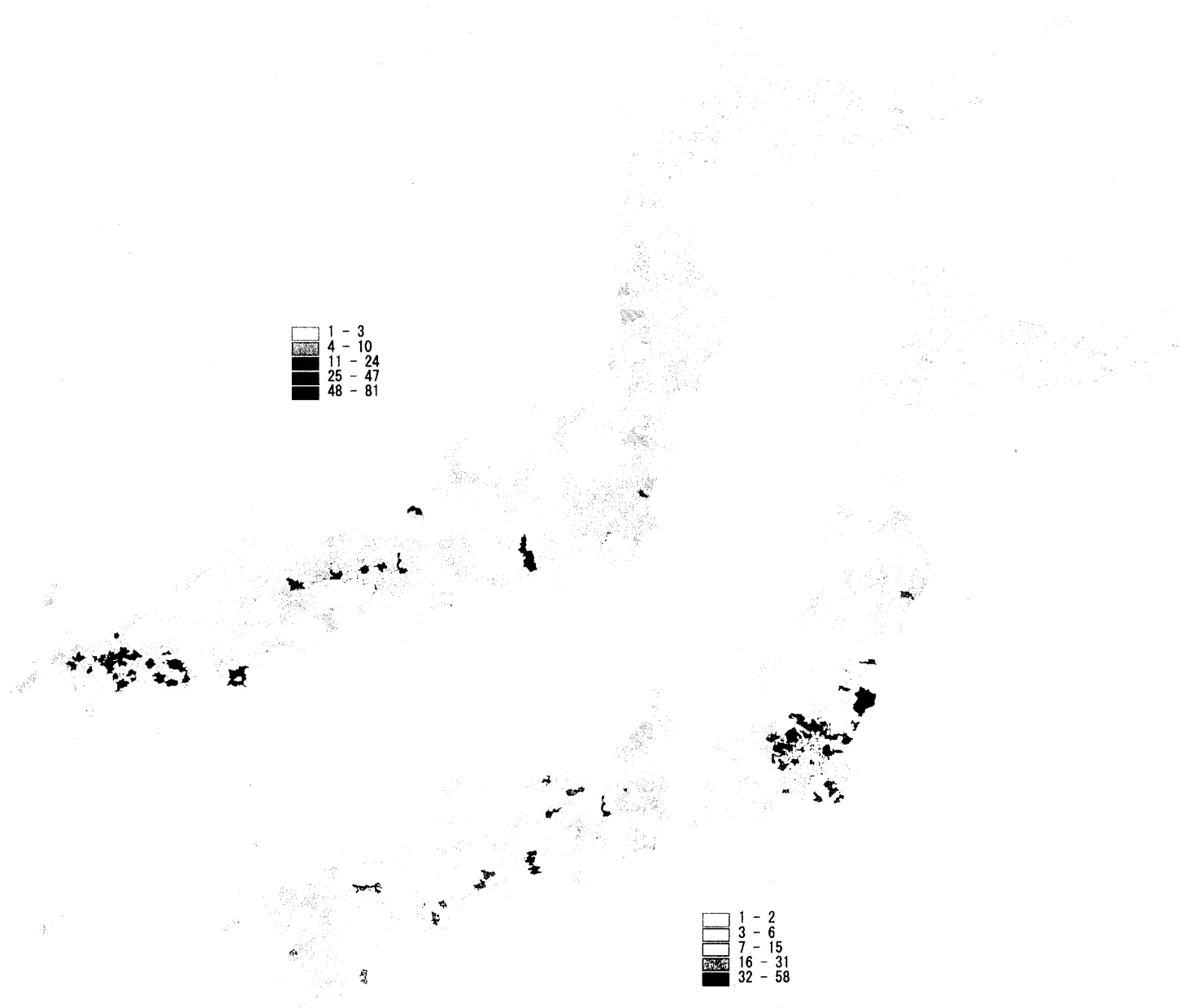


図 12-上 九州型 (天満宮の分布)

蛭子，貴船，天満，日吉，若宮を含む。天満宮は全国的に分布するが，とくに九州北部に集中する。天神社と菅原道真を祀る天満宮は，もとは別であった。仏教では天蔵・地藏と同様に天神・地神があり，また高天原の神である天神と葦原中国の地祇や天上神と地母神などの信仰があり，仏神を祀った韋駄天社が天神と呼ばれるようになるものもあった。菅原道真は没後に京都北野の天神祠の傍らに天満大自在天として祀られ，道真の霊を慰める御霊信仰や落雷の難を免れる雷神信仰が結びついて全国に広まるうちに，本来の天神信仰が薄れていった。

図 12-下 関東型 (八坂社の分布)

鹿島，香取，八坂，水，浅間，日枝社を含む。八坂社は，関東平野に広く分布する。もともと京都東山に八坂社，牛頭天王社，祇園寺があり，ともに祇園会あるいは夏祭りをした。本地垂迹にある牛頭天王と八王子や素盞鳴命が祀られる。疫病の流行は失脚した貴族の怨霊の祟りとされ，それを慰めるのが御霊会であるが，祇園の御霊会は旧六月十五日で疫病や病虫害の流行期であるため，疫病を鎮める神とされて祇園信仰は全国に広まる。江戸時代までは天王社と呼ばれていたが，神仏分離後に八坂神社，八雲神社，氷川神社と改称されたところが多い。

さらに、八尾山地西部の<sup>にんぶ</sup>仁歩や野積では、旧八月一日から三日を風の盆・風の祭りといい、大長谷でもフカンドの祭りをしていた。大正年代には二百十日にニワカといって男達が編笠をかぶり、バンドリを着て町を歩いた。各家では赤飯・うどん・素麺・おはぎを作った(伊藤曙覧・杉原節雄, 1967)。このような風宮や不吹堂をめぐる祭りは、さらに八尾町のおわら風の盆へと変容していく。ただし不吹堂の祭りは二百十日でなく6月などにも行われている。これらの起源は、風の盆とは異なることが考えられる。

## 2. 風堂と神實の石や樹木

久婦須谷の上黒瀬では、合祀される以前の風宮の故地に、風堂という石が遺されており、また合祀先の八幡社もかつて社殿をもたず樺を神實としていた。こうした石や樹木の神實は、西隣の笹原谷にもみられる。この別荘川に沿う上笹原村では、上流の中尾に天満宮、平等に日枝社、下流の清水に神明社があり、菅原道真、大国主命、天照皇太神、が祀られる。天満宮と日枝社は4月5日が祭りで、以前は八尾町下新町の八幡社宮司が来ていた(富山県神社庁, 1983)。

中尾付近から、宮腰まで仕事の折に風の神に詣ったことがあるという。また笹原谷の上流にある小井波でも、風が強くて風の神を祀っていたが、その跡はなくなったという。笹原谷には風神は祀られなかったようであるが、周辺には出かけていた。

平等の日枝社では、4月5日と10月22日が祭りで、富山市呉羽の姉倉比売神社宮司が来る。平等の隣の<sup>だいら</sup>古宿では、別荘川右岸の低位段丘上標高190m付近に杉を祀る(図7)。齒の痛いのが直るといわれており、付近では松の木も祀られている。なお前述のように下伏の栗島社でも、齒の神が祀られていた。

古くは延長五(927)年の延喜式によれば、魚津市<sup>きちじま</sup>吉島の<sup>たていわかつ</sup>建石勝神社では立石が信仰対象とされていた(久保尚文, 1978b)。各所に残る古宮といわれるものの多くは、もともと社殿などの建造物もなく、境域内の天然物を御神体としていた(卯花村史編纂委員会, 1951)。八尾町ではほかに、諏訪町の諏訪社は境内の樹木、中神通の神明社は榎、同稲荷社は松、岩島の八幡社は神木、のように樹木が神体とされ、葛原の矢坂社、狛師ヶ原の熊野社、下田池の天神社では立石を神実とし、西松瀬の八幡宮も享和元(1801)年に木製神像と社殿を作るまで、石を神実としていた(杉原節雄, 1967)。

この地域では社殿があっても境内には必ず立石があり、石を神實としていたことにかかわると考えられる。上新川・婦負郡では、昭和17年の神社明細帳(富山県, 1978a, b)より集計すると、社殿をもたず樹木や石などを神實としていたのは42社にのぼる。このうち樹木と石は同数で、樹種は杉が多い。とくに新保村には18社があり、扇状地にも多かった。

ところで魚津市金浦町の場合、素盞鳴尊を祀る杵築神社が、猛風雨鎮静のために勧請されたのは文政年間(1818~1830)である(広田寿三郎, 1971)。慶応元(1865)年の記録による

と、大山町有峰の西谷宮に二十一社大権現と風宮が祀られていたが、その後二十一社大権現は神明社に転化され、風神は豊受大明神に転化された。折谷でも、<sup>おさなみごぜんやま</sup>小佐波御前山(754m)の強風を防ぐために、舟舩の分社として明治30年よりフカン堂の風神を奉斎している。桑原にも風神を祀っており、人々は婦負郡の牛嶽社の風神と同じく、スナトベの神にお祈りした(大山町史編纂委員会, 1964)。

八尾町掛畑で、風宮が社殿に合祀されたのは明治42年であった。舟舩や下伏でも同様にこれらは社殿の創建にあたり、それ以前には風堂のような石や樹木が神實として、風神が祀られていたものと考えられる。また本来の風の神からこの頃大きく変容したようである。

## 3. 風宮と山岳信仰とのかかわり

神通川流域では石や樹木が神實とされるほか、山岳信仰もみられる。小矢部市、福岡町、城端町、高岡市などでも多くの祠や樹木を対象にし、そこに山の神が祀られる(宇治 伸, 2000)。山の神は春から秋には田の神になり、また稲作への風害をもたらす風は山から吹くので、山岳信仰と風神信仰には深いつながりがある。

八尾山地では、牛嶽社をはじめ熊野社や白山社の山岳信仰がみられる。牛嶽社では大己貴命や素盞鳴尊を祀るが、もとは自然神で牛嶽そのものを祀っていた(杉原節雄, 1967)。すなわちこれらの神は、かつて牛嶽に鎮座したという高瀬神社で祀られるため、後世に兼帯の神職によって、また牛頭天王にちなんで比定されたと推定されている(小倉 学, 1984)。また牛嶽の名はその雪形にちなむが、農事の指針となるため稲作とのかかわりが深い。

牛嶽の南方で婦負、砺波、飛騨の境にある金剛堂山も、山岳信仰の対象であり、文武天皇の頃(697~707)役小角が開山したといわれる(石崎直義, 1984)。前述のように八尾山地には伊須留岐比古神社があり、明治初めに同じ山岳信仰の熊野社に改称された。

また下笹原、上笹原の旧家の多くは、上流の小井波から出たといわれる(成瀬昌司, 1967a)。この地域では、みな山から入ってくるといわれ、山から開けた。すなわち山との結びつきの深い地域である。

これらのように山とのつながりが深く、多くの山々が広く信仰の対象とされた。ここで、山の神は風の神と多くの共通点をもつために、山の神が祀られるところでは風の神への祈願が山の神になされたことも考えられる。実際、大山町では牛嶽は風の神と目されている(大山町史編纂委員会, 1964)。山岳信仰の神社に付近に風宮はみられず、また合祀されることもないのは、山の神と風の神の共通性によることが考えられる。

## 4. 風宮と神社の変遷の影響

八尾山地にみられるように、風宮は合祀により、以前の形とは異なってきている。風宮について創建、移転あるいは廃止など明らかではないものが多い。

神社は延喜式には4132社が記されるが(表4a), この他のものを加えると, およそ3万余社あったと推定されている。越中では, 前述のように延宝二(1674)年より, 奉仕兼帯者の神主から社号祭神書上帳の類が提出されている(表4b)。その後は書き改められないのが普通で, こうした書上や明治初年に提出の届書をもとに, 明治13年頃に神社明細帳が作成された(小倉 学, 1984)。近世にはおよそ村にみあう数の神社があり, 明治12年の直前調査では, 19万3000社といわれる。

この後, 明治39年末から神社合祀, 整理があり, 昭和18年には無格社整備があつて, 終戦までは11万社ほどであった(表4c)。さらに昭和21年に宗教法人令が改正されて, 神社庁(本庁)が発足し, 以来8万余社となっている(表4d)。本論では本社ほかに境内社も集計したため, 合計では12万余社となった(表2)。戦前の無格社のかかりが合祀, 整理されたが, 境内社として存続したため類似の数となったことが考えられる。

仏教系寺院が多数の宗派に分かれるのと異なり, 神社はもとそれぞれが独立しているため, 宗教法人となった戦後よりも前の状態を把握するのは困難である。新たな神社が創建されるのは例外的で, 近隣的神社が合併して新しい名称に変わったり, 過疎化により神職の本務社に合祀されて元の社名が失われたりした。そのため, 古くからあった風の神を祀る祠などが, 明治以降に移動, 合祀など急速に変遷し, また同様に風の祭祀が, さまざまな神社で行われるようになったと考えられる。

表4 神社数の変遷

a) 延長五(927)年 『延喜式』 計 4132 社	
五畿内中心の官幣大社: 304, 同小社: 433	
他諸国中心の国幣大社: 188, 同小社: 3207	
b) 延宝二(1674)年～ 社号祭神書上帳類	
明治12(1879)年 神社明細帳	17万6千余社
c) 明治末年 11万余社	
昭和20年 総計109,930社	
官幣大社 62, 中社 26, 小社 5, 別格官幣社 28	
国幣大社 6, 中社 47, 小社 44 計 218 社	
府県社 1148, 郷社 3633, 村社 44,934	
無格社 59,997	
d) 昭和57年 宗教法人の神社	81,346社
平成10(1998)年12月31日現在	
単位宗教法人	182,928
神社	81,347社
文部大臣所轄の神社	79,588社
神道系の神社	79,577社
神社神道系の神社	79,466社
神社本庁包括の神社	79,206社
神社本教ほか14派の神社	
教派神道系, 新教派系の神社	
仏教系, キリスト教系, 諸教系の神社	
都道府県知事所轄, その他, 単立宗教法人の神社	
寺院, 教会, 布教所, その他	

※ b), c)は藺田稔(1985), d)は文化庁(2000)より集成

## 5. 主要社の広域への展開の影響

風宮は, 八幡社ほかさまざまな神社に合祀されている。古来, 地域の人々により氏神や地主神が祀られたが, 平安初期以降には霊威のある神々が各地に勧請された。地主神は, 渡来神や今来神に母屋をわたし, 末社の形をとるようになった(岡田荘司, 1985)。前章のように有力な神社は各地方に展開しており, 風神の祭祀にも影響したことが考えられる。

現在の神社分布に至るには, さまざまな経緯がある。8世紀中葉からの神仏習合により, 寺院の鎮守として東大寺に八幡宮, 法隆寺に龍田神社, 比叡山延暦寺に日吉神社, 高野山金剛峰寺に丹生都比売神社が勧請された(上田賢治, 1985)。こうした神仏習合も絡んで, 神社領には本社を分祀し, 寺院領には本寺の鎮守神が勧請される。また国司・領主の荘園にも氏族の鎮守神が勧請される。平安末には, 二十二社が有力な神社であった(表5)。

表5 平安時代末期の二十二社

上七社: 伊勢・石清水, 賀茂(上・下), 松尾, 平野, 稲荷, 春日
中七社: 大原野, 大神, 石上, 大和, 広瀬, 龍田, 住吉
下八社: 日吉, 梅宮, 吉田, 広田, 祇園, 北野, 丹生川上, 貴船

土岐昌訓(1985)より

鎌倉時代には, 清和源氏の氏神の八幡神が, 幕府や東国武士の中心的信仰となり, さらに全国の領地に勧請された。また諏訪, 妙見, 熊野, 祇園, 天神なども武士により広められた(岡田荘司, 1985)。室町期からは村落の農民などにより, 勧請されるようになる。中世末から近世初にかけて開かれた村では, 神明, 天神, 稲荷などの農耕神が多い。近世では学問, 商売, 火難除, 疫病除, の神が庶民の崇敬を得ていく。天神・雷神は雨をもたらす農耕神でもあるため, 地方にも広まった(岡田荘司, 1985)。

鎌倉時代以降には寺院にならい, 八幡, 神祇, 春日, 諏訪, 熱田, 熊野, 談山, 天神, 稲荷, 日吉, 丹生, 清滝, 猿投などの講が作られた。また御師により伊勢や熊野講も組織され, 伊勢の神は農耕神として後には福神的性格ももつようになり, 飛神明・今神明という形で広められた。北陸では修験者によって立山講や白山講なども組織された。

稲荷社は食物や蚕桑を司る倉稲魂神, 豊宇気比売神を祀るが, その初午の祭りは山の神が里に降りて田の神になる頃であるため, 農村で容易に受容され, 稲荷社への改名がすすんだ。近世には殖産興業, 商業, 漁業の神として, 都市にも広まった(岡田荘司, 1985)。

現在でも, 風宮と不吹堂, 風祭と風の盆, というように, 鎮風祈願には神式, 仏式の要素が混交しており, 神仏習合のあとをのこす。また風の神に山の神や田の神の要素が含まれることは前述のとおりである。そのため風の神が祀られる地方では, 山の神や田の神も多数祀られる。ただし地方に展開した神社は, 当初は農耕神としての神格がなくても後には備えるようになった。こうした変容により, 風の神が全国各地

で祀られると同時に、それぞれの地方に展開しているさまざまな神社と結びついたと考えられる。

## V おわりに

本論では、八尾山地を例に風宮の立地からその風災などのかかわりを調べ、また神通川流域や富山平野周辺の神社の分布と風宮分布との類似性を明らかにし、さらに全国の広域社の分布から風宮と各地方で異なるさまざまな神社との関係について検討した。風宮では本来風鎮祈願がなされるが、現在の分布には局地的にも広域的にも異なる要因がかかわっており、また古代以来、明治以降においてもその関係は変化した。本論での成果をまとめると以下のである。

a) 風宮は古くからの祭祀の形を遺している。風堂にみられるように立石が神實とされ、また砂を神實とするというのも同様であると考えられる。

b) 風神の祀られるところには水神も祀られている。しかし、両者は異なる祈願の対象であり、また祀る人々が集まる範囲も異なり、明瞭に区別されている。

c) 風宮が分布する地域は山麓や山間で、山の神が祀られる範囲でもある。山の神は風の神ともみなされており、特定の山岳を対象にした信仰のあるところでは、風宮としては祀られない場合がある。

d) 風宮は多くの神社と同様に、合祀や神社名改称等の影響を受けてきた。風神は稲作が行われるところで祀られており、五穀豊穡を祈願する神への転化もみられる。

e) 風宮を祀る神社の由緒は明らかでないものが多いが、主要社がさまざまな形で勧請されて広域へ展開する中で変遷したとみられる。藩政時代にも寺社政策の影響があり、また、隣接地域との交流の影響が強くみられる。

これらの風宮にかかわるさまざまな特色から、風神は古くから氏神などとともに祀られており、そこに八幡社や後には神明社が勧請される中で変遷したことが考えられる。近世には霊驗あるいは神徳への理解も変容し、地域にはさまざまな神社が展開する。それぞれに異なる神徳の神々が祀られ、地域の人々は崇敬する各社に詣るようになるが、災害、離村等々で合祀などが行われると、風神や風宮の由緒も不明になっていったことが考えられる。

なお風祭は、6月や9月に行われる。祭りには春秋の農耕に関する氏神系の祭りと、夏の怨霊を慰める御霊系の祭りがあるが、風祭が現在異なる季節に行われることには、風宮へと同時にさまざまな要因が影響しているように考えられる。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、八尾町、大沢野町での調査では、現地の多くの方々より多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします。

## 参考文献

- 井沢正裕他(1985):用語篇。『日本宗教事典』弘文堂, 193-210.
- 石崎直義(1984):古代・中世の光と影。山田村史編纂委員会『山田村史』山田村, 51~88.
- 伊藤曙覧・杉原節雄(1967):民俗。八尾町史編纂委員会『八尾町史』八尾町, 686~806.
- 上田賢治(1985):神仏交渉と神道の自立。小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂, 60-66.
- 宇治 伸(2000):民俗学への道(II)。新響社, 341p.
- 卯花村史編纂委員会(1951):卯花村史。富山県婦負郡卯花村, 397p.
- 大山町史編纂委員会(1964):大山町史。大山町, 1717p.
- 岡田莊司(1985):霊威神と崇敬講。小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂, 73-80.
- 小倉 学(1984):越中・牛嶽社の祭神考。山田村史編纂委員会『山田村史』山田村, 747-763.
- 川口謙二編著(1999):日本の神様読み解き事典。柏書房, 510p.
- 久保尚文(1978a):越中の神社。梅原隆章・北沢俊嶺監修『富山の寺社』巧玄出版, 184~186.
- 久保尚文(1978b):古代国家と延喜式内社。梅原隆章・北沢俊嶺監修『富山の寺社』巧玄出版, 187~192.
- 久保尚文(1978c):日本海文化と神社。梅原隆章・北沢俊嶺監修『富山の寺社』巧玄出版, 206~208.
- 久保尚文(1978d):荘園制度と勧請神。梅原隆章・北沢俊嶺監修『富山の寺社』巧玄出版, 228~233.
- 久保尚文(1978e):江戸時代の民衆と神社。梅原隆章・北沢俊嶺監修『富山の寺社』巧玄出版, 259~262.
- 重杉俊雄(1958):風土富山。清明堂書店, 352p.
- 重杉俊雄(1967):山村開拓と新田開発。八尾町史編纂委員会『八尾町史』八尾町, 549~590.
- 神社本庁教学研究所(1996):祭礼データによる著名神社の分布調査。神社本庁教学研究所紀要, 1, 299-311.
- 杉原節雄(1967):神社と寺院。八尾町史編纂委員会『八尾町史』八尾町, 807~921.
- 全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会(1995):全国神社祭祀祭礼総合調査。神社本庁.
- 藺田 稔(1985):氏神と家郷社会。小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂, 80-88.
- 田上善夫(2000a):富山の不吹堂の風神祭と局地風地域における風の祭祀。富山大学教育学部紀要, 第54号, 1-13.
- 田上善夫(2000b):富山県周辺における風祭と風鎌について。富山大学教育学部研究論集, 第3号, 69-82.
- 田上善夫(2001):北陸における風鎮祈願にまつわる行事とその由来。富山大学教育学部紀要, 第55号, 1-15.
- 田口克敏(1917):風神堂に就て。富山県気象報, 151, 2.
- 土岐昌訓(1985):神祇と国家祭祀。小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂, 67-73.



富山県(1978a)：神社明細帳[1]上新川郡(原本：富山県手録  
昭和17年)，富山県。  
富山県(1978b)：神社明細帳[4]婦負郡(原本：富山県手録 昭  
和17年)，富山県。  
富山県神社庁(1983)：富山県神社誌。富山県神社庁，884p。  
長島勝正(1968)：宗教・文化。婦中町史編纂委員会『婦中  
町史』婦中町，601-870。  
成瀬昌司(1967a)：村々のはじまり。八尾町史編纂委員会  
『八尾町史』八尾町，161～250。  
成瀬昌司(1967b)：他領他国との交渉。八尾町史編纂委員会  
『八尾町史』八尾町，657～685。  
広田寿三郎(1971)：魚津地方の民間信仰。富山史壇，49，  
42-49。  
深井三郎(1979)：地形分類図。『土地分類基本調査「八尾  
(富山県)」』富山県，17-29。  
深井三郎(1980)：地形分類図。『土地分類基本調査「五百石」』  
富山県，9-20。  
文化庁(2000)：宗教年鑑。ぎょうせい，176p。  
米原 寛(1996)：婦中町域の寺社。婦中町史編纂委員会  
『婦中町史，通史編』婦中町，490-508。